

●ニューヨーク証券取引所上場

2010年11月1日、三井住友フィナンシャルグループ（SMFG）はニューヨーク証券取引所（NYSE）に上場した^{*415}。NYSE上場の実現に至る道筋を概観すると、次の通りである。

*415 厳密には、上場されたのは、スポンサー付米国預託証券（ADR：American Depositary Receipt）。ADRは、外国企業の株式（原株）を裏付けに、預託銀行が米国市場での流通を目的として発行する証券。SECへの登録によって、米国企業の株式と同様に売買・決済、保管される。スポンサー付ADRとは、原株の発行会社（スポンサー）が特定の預託銀行と預託契約を締結し、発行会社、預託銀行および投資家の権利義務を明確化した上で、当該預託契約に従って預託銀行が発行するADR。ADRの上場は、外国企業がNYSEに上場する際に用いる一般的な方法である。なお、本件のNYSE上場において、SMFGは、実績、サービス内容等に基づき、シティバンクを預託銀行に選定した。

(1) NYSE 上場準備に至る背景

NYSE は世界の証券取引所の中でも影響力と注目度が突出して高く、その上場企業には、米国の大型優良企業や各国のグローバル企業が数多く名を連ねている。このような名声のある市場に上場し世界における投資家基盤を広げることは、当行発足前の旧両行の当時から目標としていたが、不良債権処理、金融再編などへの対応のため、上場の本格的な準備には至らなかった。

改めて NYSE 上場構想が動き出したのは、2006 年 10 月に SMFG が公的資金返済を完了し、また 2007 年 4 月に「最高の信頼を得られ世界に通じる金融グループ」を目指すことを掲げた「LEAD THE VALUE 計画」を開始して、SMFG および当行の経営が新たな段階に移行した時であった。この時点で既に、国内主要金融機関である三菱 UFJ フィナンシャル・グループ、野村ホールディングス、みずほフィナンシャルグループが NYSE に上場していたことも、SMFG および当行の判断に影響した^{*416}。

2007 年 12 月の経営会議は、「最高の信頼を得られ世界に通じる金融グループの実現に向けて、グローバルプレーヤーとしてのビジネス展開を加速する体制を構築」することを狙いとして、NYSE 上場プロジェクトを開始することを決定した。上場のメリットとして特に意識したのは、米国 SEC の厳しい審査を通過することで経営の透明性・健全性が証明され市場の評価が高まることであった。投資家層の拡大・多様化も意識した。副次的には、国内外での経営戦略の機動性、柔軟性の確保につながるというメリットもあった。米国の証券関連諸法制においては、米国人株主比率 10% 超の企業との株式交換等の事業再編について、日本企業同士との組織再編も含めて、原則として米国 SEC 宛てに登録義務を課しており、そのための提出書類は、NYSE 上場維持のために提出する年次報告書の内容と重複が多いためである。

(2) NYSE 上場の準備活動

プロジェクトチームによる情報収集などの初期調査を経て、2008 年 4 月、SMFG に独立室として、また当行にコーポレートスタッフ部門の独立室として財務開発室をそれぞれ設置して、NYSE 上場に向けた本格的な準備を開始した^{*417}。財務開発室は、関係部やグループ会社、さらに監査法人などの外部専門家と協力しつつ、米国 SEC

*416 三菱 UFJ フィナンシャル・グループは 1989 年に三菱銀行として NYSE に上場。また野村ホールディングスの上場は 2001 年、みずほフィナンシャルグループの上場は 2006 年。

*417 NYSE 上場後の 2011 年 4 月の組織改定で、当行においては財務開発室と財務企画部を財務企画部として、また SMFG においては財務開発室と財務部を財務部として、それぞれ統合した。

への対応などに取り組んだ。

NYSE 上場のためには、米国 SEC に登録届出書 (Form 20-F) を提出し、登録の認可を得る必要がある。上場準備における取り組みの中で特に主要な項目は、この登録届出書の作成であった。同届出書には連結財務諸表が含まれている。従来、その会計基準としては、米国会計基準のみが認められていた。2007年11月のルール改定で、外国企業については国際会計基準 (IFRS: International Financial Reporting Standards) も認められるようになったことから、SMFG として米国会計基準と IFRS のどちらを選択するかという判断を要することとなった。

当時、IFRS による本格的な連結財務諸表を作成している日本企業は見当たらず、IFRS を採用することによるリスクと作業負担を不安視する意見があったものの、SMFG としては、先進性を強調できること、日本を含む国際的な会計基準は IFRS に統合・収斂^{しゅうれん}する可能性が大きいと見込まれることなどを踏まえ、米国会計基準ではなく IFRS の採用を決断した。実務的な観点からは、IFRS を適用する企業が初年度の財務報告を作成する際に、企業結合等の一部の項目については、費用対効果の観点から、過年度にさかのぼって行う修正を免除する規定が設けられており^{*418}、この点では IFRS の採用は作業負担が小さいというメリットが考慮された。

実際に作業段階に入ると、前例がない中で IFRS 連結財務諸表を作成することは、想定以上の苦労であった。IFRS を採用している欧州、豪州の金融機関の事例の調査に時間がかかった上に、それらの国の実務と日本における実務の違いを十分に踏まえ、最終的にどのように対応するかを決定する必要があったためである。特に時間をかけて検討した項目は、貸出金の減損 (貸倒引当金の見積もり) の範囲と判定方法、および SPE (Special Purpose Entity: 特別目的事業体) の洗い出しである^{*419}。これらの他にも、デリバティブ金融商品、投資有価証券、繰延税金資産などについても、日本基準で示した金額との差が大きいことから、注意深い検討が必要であった。

上場準備においても一つの大きな取組項目は、サーベンス・オクスリー法^{*420}を含む米国の証券関連諸法制に合わせたコーポレートガバナンス、内部統制についての

*418 IFRS 第1号 (国際会計基準の初度適用 (First-time Adoption of International Financial Reporting Standards)) における免除規定。

*419 日本基準では SPE については流動化目的等一定の要件を満たすものは連結除外とすることができる。一方、IFRS ではそのような一律の連結除外規定がなく、SPE に対する実質的な支配の有無を総合的に勘案した連結判定が求められる。

*420 会計監査人の独立性強化、経営者の責任の厳格化、情報開示の強化などを規定。外国企業も含めて米国の公開会社に適用される。

環境整備であった。2000年代半ば以降、日本においても会社法や金融商品取引法の施行などを受けて内部統制を巡る制度整備が進められていた。SMFG、当行としては、これらへの対応に加えてNYSE上場にも耐え得る態勢づくりに取り組んだ。例えば、監査人の独立性要件の充足を確保するため、SMFGおよびその子会社がSMFGの監査に関与する特定の監査法人等との間で締結する全ての業務契約について、契約締結前にSMFG監査役会の同意（事前同意）を取得する必要があるため、2009年1月、事前同意の運用を開始した。

(3) NYSE 上場の実現

上で述べた準備活動を踏まえ、2010年7月の経営会議は、最終的にNYSEへの上場申請を実施することを決定した。その後、米国SECなどによる審査を経て、2010年11月1日、SMFGはNYSEに上場した。

当日、NYSEで行われた朝食会において、NYSEのニードラウアーCEOから社長の北山に上場証明書と記念品の地球儀の置物などが贈呈された。その後、北山は取引



NYSEに掲げられたバナー

開始の合図であるオープニングベルを鳴らすため、トレーディングフロアのバルコニーに移動した。どこからともなく拍手が沸き起こる中、午前9時半に北山がボタンを押しカン・カン・カンという鐘の音が鳴り響くと、フロアからの拍手が一段と高まった（中口絵参照）。トレーディングフロアで行われた北山へのインタビューは現地の生放送で伝えられた。また、NYSE内の会議室で記者会見も行われ、日本メディア各社のニューヨーク支局や海外メディアが多数出席した。

午前の一連の催しの後には、有力ヘッジファンドのファンドマネージャーなどと昼食をとりながら面談し情報交換を行った。さらに夕方には、証券会社をはじめとする金融機関関係者などをニューヨーク市内のホテルに招いて上場記念レセプションを開催し、約200人が出席した。レセプションの会場では、コーポレートカラーを意識して、照明やテーブルフラワーなどの色調をグリーンにする演出が行われた。北山は、スピーチの中で、「合併10年目でNYSE上場を果たすのは、国際的に競争力のある

金融グループを目指すというわれわれのゴールの礎となる」旨を述べた。また、コーポレートカラーであるトラッドグリーン（深緑色）とフレッシュグリーン（若草色）が持つ意味の通り、SMFGが伝統と若々しさを有する金融グループであることを出席者に説明した。

また、ニューヨークで上場セレモニーが行われている期間、東京にいた奥にとっては、旧行当時を含め3度目の正直でようやく実現したNYSE上場だっただけに、この日の到来は感慨深いものであった。